

「ツート内緒で見に来る」

と先刻の侍の部屋へ参りまして、障子の隙間から覗きま
すと、

「コレ婦人、これは最少せうすうなれど拙者の寸志だ、櫛か簪な
と買ふがよい」

「マア旦那様、澤山に有難う御座ります」

喜イヤん早速歸つて参りました

「オイ清やん、あの侍が女に祝儀をやつてよつた、私も
やつたる……コレふしん」

「ふしんと云ふ事があるかい、婦人や」

「コレ婦人、これは僅少なれど拙者の寸志だ、櫛か簪で
も買ふがよい」

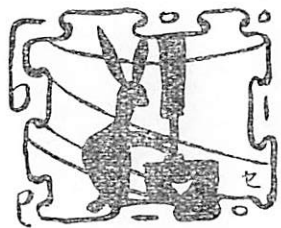
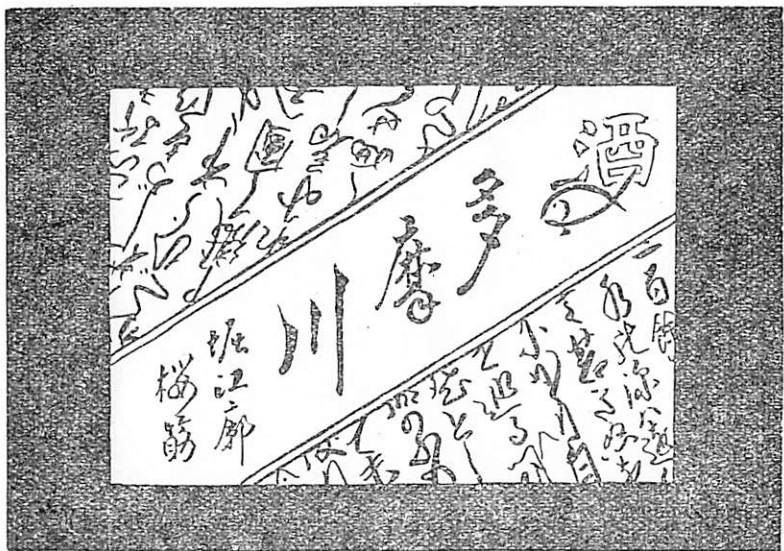
「マア妾に、櫛や簪を買ふても頭に差すところが御座りま
せん」

「そら困つたなあ、ム、……そうや鬢附なと買ふがよい」

「マア旦那さん、何をおしやる事やら、坊主が鬢附なぞ
買ふたかて仕方が御座りません」

「ナニ月代おふらぎを剃つた時、剃毛など引附て取ておくりやれ」

(終り)



林家染丸論

伊勢三郎

今春三升家小勝を失しなつて、東西落語家の最年長者
を亡くしたことになるが、それでも關西にはまだ林家染
丸、桂米團治の二老が、老來益々かくしやくとしてその
存在を示してゐる。この二老人みた處まだ、落語に對
して可成りの色氣をみせてゐる。「若い者に委せては」
といった氣を十二分に持つてゐるやうである。古稀を越
へた染丸や米團治が藝を捨てずに高座を勤めてゐるとい
ふことを私は常々感心なことだと思つてゐる。昔しなら
樂隱居の出来る年である。それにもかゝはらず高座を勤

めてゐるのは御時世とは云へ老人の御苦勞を賞めてやつ
てもいい。殊に染丸老は昨今林家染會なるものを作つて弟
子養成の爲に努力を致してゐる。まことに新しい落語
家の養成こそは目下の急務であり、こゝに目をつけてこ
の爲に染丸老が老後の落語界に貢献せんとする氣持は充
分汲んでやらねばならぬと思ふ。

○ 先達つて行友李風さんが大毎紙にラヂオ注文帖なるも
のを書たが、その落語篇に「純大阪の落語として染丸老